経験に基づく情報は伝達過程で保持されるのか？

情報の多寡と伝達状況が経験に基づく情報の伝達に与える影響

○土屋耕治・吉田俊和

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

キーワード: 情報伝達, 経験に基づく情報, 系列再生法

Is the experienced information kept in transmission processes?:

The effect of information amount and transmission context on the transmission of experienced information

Koji TSUCHIYA and Toshikazu YOSHIDA

(Graduate School of Education and Human Development, Nagoya Univ.)

Key words: information transmission, experienced information, serial reproduction

個人の経験は、社会の中でどのように記憶され、人々の行動や態度に影響を与えるのだろうか。社会の中で過去が記憶される過程には、何を他者に伝え残すべきかという判断が入り、その判断は他者の影響（社会的影響）を受けると考えられる。そこで、本研究では、言語コミュニケーション場面の情報伝達過程を取り上げ、経験に基づく情報が提示された場合、それをどのように他者に伝え残すのかという点を検討する。具体的には、系列再生法を用いた Lyons & Kashima (2001) にならない、シナリオを刺激とした実験を行い、提示された要素が、どのように記述されるのかを検討する。本研究では、提示された情報の出現に影響を与えると考えられる、情報の多寡と伝達状況进行操作し、以下の仮説を検討する。

仮説 1: 伝達状況においては、何を残すかという判断が入るため、記述される情報が少ない。仮説 2: 情報が多く提示された場合、認知的負荷が高くなるため、記述される情報の割合が少ない。仮説 3: 経験者の情報は重要度が高いため、情報が多く提示された条件においても、伝達が行われる。

方法

参加者 大学生 123 名が実験に参加し、回答に不備の無かった 120 名（男性 112 名、女性 8 名、 $M_{age} = 18.84, SD = 0.78$ ）を分析の対象とした。**実験デザイン** 独立変数は、情報の多寡（少 vs. 多）と伝達状況（再生 vs. 伝達）、提示情報の属性（ポジティブ雑誌情報（以下、雑誌ポジ）vs. ポジティブ経験情報（同、経験ポジ）vs. ネガティブ経験情報（同、経験ネガ））で、前者 2 つが参加者間要因、後者が参加者内要因であった。従属変数は、記述された文章の中の要素であった。

刺激 レストランに関する刺激文が準備された。刺激文は、情報少条件では、雑誌に書いてあった情報として、雑誌ポジ情報（“料理の種類が豊富”“雰囲気が良い”）、実際に行った人の感想として経験ポジ情報（“接客態度が丁寧”“インテリアが良い”）、経験ネガ情報（“お酒の種類は少ない”“店内は少し清潔さに欠ける”）が、情報多条件では、情報少条件で提示したものに加え、雑誌ポジ情報（“駅から近い”“店内からの眺めがいい”）、経験ポジ情報（“新しいお店”“空間が広い”）、経験ネガ情報（“素材に気を遣っていない”“盛りつけのセンスはあまり良くない”）で構成されていた。情報少条件では、雑誌ポジ、経験ポジ、経験ネガ情報が各 2 つ、情報多条件では、各 4 つであった。

手順 実験は集団で行われ、以下の 5 つのフェイズから構成されていた。(1) レストランの紹介を読み、どのようなものか頭に思い描くように教示された。(2) 刺激文が提示された。(3) フィラー課題としてアナグラム課題を提示された。(4) 再生条件では、先ほどの紹介文を正確に再生することが、伝達条件では、先ほどのレストランを、友人に紹介する場合の記述を求められた。(5) 行動意図（“先ほど紹介されたレストランに行ってみたい”）、統制項目（6 件法）へ回答を行った。

結果

操作確認 参加者の日常経験、経験者への信頼において群間で違いはなかった (all $F_s(1,116) < 1.91, ns$)。

記述のコーディング 記述された文章に、刺激文で提示された要素がどれだけ出現するかをコーディングした。提示された属性の量を 100% とし、要素（雑誌ポジ、経験ポジ、経験ネガ）ごとの出現率を算出した。情報量と伝達状況が出現率に与える影響を検討するため、出現率に対して、情報量（多 vs. 少）、伝達状況（再生 vs. 伝達）、要素（雑誌ポジ vs. 経験ポジ vs. 経験ネガ）を要因とした 3 要因分散分析（反復測定）を行った (Figure 1)。その結果、情報量 ($F(1,116) = 30.94, p < .001$)、伝達状況 ($F(1,116) = 32.68, p < .001$)、要素 ($F(2,232) = 6.44, p < .01$) の主効果が有意で、それぞれ、情報少条件、再生条件、経験ネガ情報において出現率が高かった。情報量と要素 ($F(2,232) = 2.41, p < .10$)、伝達状況と要素 ($F(2,232) = 2.82, p < .10$) の 1 次の交互作用が有意傾向だったため、単純主効果の検定を行ったところ、情報少条件では、経験ネガ情報が他の二つの要素に比較して有意に多かった ($p < .01$) のに対し、情報多条件では、要素で出現率の違いは見られなかった。また、再生条件では、経験ネガ情報が経験ポジ情報よりも出現が多かった ($p < .01$) のに対し、伝達条件では、経験ネガ情報が雑誌ポジ情報よりも出現が多かった ($p < .05$)。2 次の交互作用は有意ではなかった ($F(2,232) = 1.95, ns$)。

考察

何を伝え残すべきかという過程に影響を与えていると予測された、情報の多寡、伝達状況、提示情報の属性が、それぞれ記述された属性の出現率に影響を与えていた。これは、仮説 1, 2 を支持する結果であると言える。しかし、想定された情報量と伝達状況の交互作用は確認されず、仮説 3 は支持されなかった。本研究では、情報伝達者が一人の場合を扱ったが、経験に基づく情報が重要視されるのは、情報伝達の連鎖が一定数存在する場合である可能性もある。今後は、記述された情報を刺激として提示することで、長期的な伝達過程における影響も検討していく必要があるだろう。

Figure 1 The description rate of presented information